一　大和之介物語

「人の世の幸福は、健康で心楽しく、子孫の繁栄が第一で、次は長生きをすることである。高い位と富とは下とする。幸福の種は明徳であり、この種を蒔いて幸福を作る土壌は、日常奢らず、怒らず、親に仕えて孝行を尽し、夫に仕えて順従の道を守り、子を育てるには正道に従い、夫の兄弟にはほどほどに従い、使用人には情ふかく云々…。」

大和之介は、保呂羽山の神職、大友右衛門太郎藤原朝臣親卿の正統、小太郎吉継の連枝（貴人の兄弟）大和之介吉林の子孫である。気質勇猛にして仁智に優れた人であった。そのころ、守屋では神楽殿なる弥勒堂を建てられてあった。諸細匠にすぐれた大和は両破風口の懸魚（げぎょ＝破風又はその左右につける装飾）に、恵比須、大黒を彫刻した。この神楽殿は大友家との合才（合同）建立によるもので、大和之介は手伝いをしたものであるという。

昼夜にわたる紐工に励み、自宅に帰るのはいつも深夜であった。綱木（繋木）の近藤というこれも豪の者が、大和之介の剛力無双であることを聞き、これを試そうとして、白木綿で鉢巻をし、三尺（九〇センチ）の大刀を差し道路に寝ていた。

小雨の降るなかを大和は木履（木靴）を履いて通ると、道路に寝ていた者がある。「何者が夜中に道を塞ぎ、街道を狭めているのか。乱心者か酔っぱらいか」と言いながら脇の下を踏みつけて通って行った。

五、六間（約一一メートル）も行くと後から「大和か珍らしや、われは綱木の近藤である。汝は武勇のすぐれた男と聞いているので、汝を試すためにこのようなことをした。どうか私を弟分にしてください。そのしるしに、われらが重代鬼神太夫というこの刀を兄弟のしるしに進ぜよう」と言って腰の太刀を差し出した。この太刀は大和家代々の宝物として伝えられたと言われている。

そのころ、湯沢豊前の侍で某という大科人（罪人）が、参詣の者であると偽って本家に滞在していた。このことを聞いた豊前殿は「某は科人であるから召し捕ってもら

いたい」と丁重な書札（手紙）を寄せてきた。ぜひ召し捕らねばなるまいと、数日にわたって心がけたが召し捕ることができなかった。

某、召し捕りの大役が大和に命じられた。箸をかかせて（削らせる）その隙を狙うか、豆腐を焼かせて油断したところをつく…など、いろいろ考えたが名案は浮かばず、濁酒を大きな器に入れ、自分が酌をして討ち取るべし―と言うことにした。

その者も文武二道にすぐれた勇士であった。大刀はあずかり、小刀を差しているが「小脇差を貸し給へ」との願いに、九寸五分（二八・五センチ）の脇差を貸しておいたところ、しきりにこれを磨き、昼夜これを身につけていた。

盃を差しだし、大和は酌をした。浪人の盃に酒を注ごうとして、大徳利の濁酒を顔にかけ、左の手を取り、横伏せにして縄をかけようとしたが、浪人は小脇差を抜いて大和の背後から力まかせに突きかけると、脇差は大和の背中を貫き、一の髄から一一～二の髄まで斬り通され、血は滝のように流れでた。

〝大和すでに危し〟と見えたが、少しも気をゆるめず、すぐに縄をかけた。浪人も「われを捕えんとする者は大和以外にはない」と兼ねてから思っていたが、捕われの身を歯がみして口惜しがったという。大和の背中の傷は大きかったが少しもひるむことなく、療治を尽くして治したという。この傷あとは大樋のような大傷であったということである。

大和は八〇余歳まで長寿を保ち、承応元年（一六五二）壬辰霜月（十一月）の七日に亡くなった。霊名を「心月霊安居士」という。妻は滝村（南外村）佐藤市助の娘で、寛永十三年（一六三六）丙子五月二十六日に亡くなっている。霊名を「峰宝妙星信女」という。

その子作拾郎は万治二年（一六五九）己亥正月十一日に亡くなっている。一閑常声と言う。その妻は、外小友（南外村）十二ケ沢、与右衛門の娘で、寛文二年（一六六二）申二月二十五日に死し、「春山妙光信女」という。作拾郎に二人の妹があり、一人は角間川内町、大沢十右衛門の妻、もう一人は、滝の上菊地喜助の妻となった。この人、稲荷明神が鎮守であり、屋敷のうちに勧請して信仰したといわれている。